

座談

竜楽のおじやまします

中大への思い

井川公彦 × 大友浩 × 三遊亭竜楽



大友浩 演芸研究家、エッセイスト
おとも・ひろし 1958年4月23日東京
深川生まれ。1981年3月、中央大学法学部
卒業。1991年4月、演芸情報誌『東京かわ
ら版』編集長。2003年9月よりフリーの演
芸研究家、エッセイスト。平成15年度文化
庁芸術祭審査員。「林家彦六賞」審査委員。
「全国地域寄席連絡会」顧問。近く著書『花
の志ん朝』（ぴあ）出版予定。



井川公彦 脚本家・作家
いがわ・きみひこ 1957年愛媛県生まれ。
中央大学法学部通信課程在学中（本学法学
部を81年中退）。「太陽にほえろ！」で
デビュー後、「暴れん坊将軍」「三匹が斬る！」
「土曜ワイド劇場」など数々のTVドラマを
執筆。時代小説「露の五郎兵衛」で小説
CLUB 新人賞受賞。小説、舞台、劇画原作な
ど幅広く活躍中。



三遊亭竜楽 落語家
さんゆうてい・りゅうらく 1982年中央
大学法学部卒。85年三遊亭円楽に入門、93年
真打昇進。日本放送作家協会会員。中央
大学では、学員講師として各地で講演を行う。
今秋、国立演劇場で百回記念の独演会を開
く。

竜楽 今回で六回目を迎えた「竜

楽のおじゃまします！」ですが、今までは、大学の先生方を訪ねていましたので今回は特別編ということで私の大学の同級生で、しかも学部が同じというお二人に、大学時代の思い出とか、これからの中央大学への要望などいろいろお聞きしたいと思っています。

脚本家の井川公彦さん。それから『東京かわら版』編集長の大友浩さんです。

激動の学生時代

竜楽 早速ですが、我々の学生時代というのは多摩に移転しまして、激動の時期という感じだったのですが、皆さんどんな学生時代だったかということをお話いただけますか。

大友 我々は駿河台校舎を知っている最後の世代なんです。一年間駿河台へ通って、二年生から多摩です。そのギャップがありましたよね。

竜楽 うーん、そうですね。

大友 私が一番思い出に残っているのは、全共闘運動の生き残りがまだいた時代で、駿河台校舎の狭い中庭にマイクを持って「我々はあ、な

になにだからあ」という調子の演説をやっていた、結構迫力があってちよつと怖いと思っていました。それが多摩へ行ったと同じことをやっていたても、あの広いキャンパスで、ぼーっと青空に抜けていく感じで、張り合いがなくなつたんでしょうね。半年ぐらいで聞かなくなりました。

竜楽 そう言えばそれほど大きな学生運動というのは……。

井川 駿河台はなんだかくすんだような感じの校舎だったじゃないですか。バリエードもあって「刑務所みたい」とか言つてなかつた？

竜楽 そう。キャンパスが刑務所の中庭みたいだったからね。

大友 ロックアウトとかいう言葉がまだ真実味を持っていましたよね。

井川 そう、そう。

大友 多摩に来たら、それよりマ

ムシが怖かったりしてね。血清が二本しかないと言われて、三人目はだめだと思つていたんですよ(笑)。

井川 僕は、某地方の国立大学へ行つていて、それをやめて受け直して東京へ来たんです。田舎出身だから単に田舎が嫌で、都会へ行きたいという思いだけでした。その意味ではお茶の水の環境というのは、ジャズ喫茶があつたり、雀荘があつたり、古本屋があつたりして、田舎から来た学生にとっては『学生街の喫茶店』の現実があつて、嬉しかったんです。でも「移転反対」運動していたじゃないですか。いま反対しているんだから十年ぐらい先だろうと思つていたら「来年からだよ」って言われてがくぜんとしましたね。

竜楽 僕も群馬の田舎出身だけど、当時の多摩はうちの田舎より田舎だから……(笑)。

井川 今は違うんですよ。僕は今多摩キャンパスの近所に住んでい

るんですけど、大きな通りや団地が

いっぱいできて、都立大学とかいろいろな大学が移転して、本当に学生の文化の町になっていっているんです。

大友 僕にとっては、駿河台のあの雰囲気を経験できたのはよかったですよ。お茶の水という町が、勉強する学生の町から遊びの町へ変わるところある端境期だったと思うんです。

竜楽 そうですね。

大友 だから勉強する学生の町だという雰囲気も味わたしたし。

竜楽 学生街っていうのは、健全さも良いけどある程度わい雑なところが無いとね(笑)。

大友 私はあの頃、司法試験を受けようと思つて瑞法会つていうところに入っていました。

竜楽 瑞法会ですか。

大友 ええ。でも劣等生でしたね。

竜楽 いえいえ、落語評論などを見れば、法律を勉強しているだけあつて非常に論理明快だと思います。

大友 とくどき、理屈嫌いの落語ファンに怒られたりするんです。

井川 二人とも弁護士を目指して
いたんですか。

竜楽 そうですね。

大友 竜楽さんもそうだったの？

竜楽 そうですね。三回ぐらい受
験しました。

井川 そういえば竜楽さんは、落
語法律相談という企画をやってます
ものね。

竜楽 ああ、そうだ。皆さんの
関わりについて話をするのを忘れま
したね。井川さんと知り合ったのは、
脚本家連盟に入ってからです。僕は
落語法律相談「暮らしのQ&A」と
いう番組で脚本を書いて、いくらか
収入があったので、脚本家連盟に入
る資格をもらいました。

井川 そうですね。最低脚本料と
どれぐらいオンエアしたかという最
低限度があつて、それを満たした人
は、日本脚本家連盟に入れるんです。

大友 脚本家になるの？

竜楽 脚本家なんですよ、一応(笑)。

大友 そうなんです。そりゃあ、

知らなかった。

竜楽 大友さんは、落語情報誌の
「東京かわら版」の編集長をやつて
おられます。かわら版について簡単
にお話してください。

大友 もう二十七、二十八年続い
ている日本で唯一の寄席演芸専門の
情報誌です。十年ちよつと前から編
集長ということになって、そこで竜
楽さんと知り合つたんです。

竜楽 確か、関西の落語家さんが
よく使う見台というのあるでしょう。
講釈師が使うようなやつです。そ
れを「かわら版」さんのところで借
りたのがきっかけで、お話しするよ
うになつたんです。そしたら同級生
だつたということです。

大友 本当にびっくりして。

竜楽 そう、全然知らなかつたね。

大友 それで法律相談という会も
企画して。

竜楽 そうだ、落語裁判というの
をやつたんですよ。

井川 落語裁判？ それは何？

自分が裁判官になるんですか。

竜楽 そうです。僕は、弁護士か
検察官かどちらかですけどね。

大友 まず、竜楽さんが一席古典
落語をやつて、その落語について、
裁判をするんです。

竜楽 登場人物が有罪か無罪か。

井川 おもしろいですね。

竜楽 「品川心中」だと、自分だ
け助かっちゃつた女がどうかかね。

井川 ええ、それが有罪になるか
どうか。むしろ、それ、テレビの企
画になりますよ。

竜楽 あと奉公人に無理やりひど
い義太夫節を聴かせる「寝床」の主
人が、傷害罪か監禁罪になるかどう
か(笑)。

井川 なるほど。法律を勉強した
かがあつたわけですね。

無駄にならない学生時代の活動

竜楽 そういえば、多摩へ移転し
た頃の話が途中でしたけど、井川さ
んの学生時代はどんなでしたか。

井川 僕はこう言っちゃあなん
ですけど、授業にほとんど出ていな
いんですよ。

竜楽 何をしていたんですか。

井川 映画研究会というのがあつ
て、僕は映画卒だと自分で思つてい
るんですが、映画を作っていたんで
す。その頃僕たちは、プロになるぞ
という夢を持った人が多かつたので、
とにかく百五十万円とか二百万円の
資金で、九十分ぐらいのちゃんとし
た劇映画を撮っていました。十六ミ
リで撮影する時は、俳優さんを雇
うんですが、八ミリのときは大学生と
か、ちよつとした劇団の子役を雇
つて撮っていました。中央大学の広い
キャンパスそのものが、トレンドイ
ドラマみたいで、撮影するのに非常
にいいわけですよ。

大友 なるほどね。

井川 ペDESTリアンデッキを映

像で見ると非常に美しいんです。

竜楽 撮影には絶好ですね。

井川 そうなんです。喫茶店やレ

ストラン、病院にもなるんです。そして後ろには、学生のエキストラが通ってくれますから、すごくいい環境で、すばらしいスタジオだなと思っていました。

竜楽 そうか。

井川 ある映画で、マラソン大会のスタートのシーンをクラスやクラ

ブのメンバー六十〜七十人呼んで、多摩キャンパスの正面の坂で撮ったんですよ。高台から全景も撮ったりして。要するに撮影所代わりです。

竜楽 それは本物のマラソン大会じゃないでしょう。

井川 はい、うそですよ。大学の校内に、ぐるっと自動車道路ってあ

りますよね。あれをマラソンコースに見立てて、撮影していたんです。

竜楽 なるほど。

井川 ちょうどそのときの学長が戸田修三先生でいらつしやいますね、「どいう話なの」と言つて、わざわざ車から降りてきて話しかけてくれたんです。あらずじをお話したら「そうか。頑張つてやつてね」ってやつて下さったので、もう学長のお墨付きを貰つたということで、堂々と

できました。こんな状況だから、僕にとつては学校の勉強よりも、映画のために通つている時間のほうが多かつたですね。

大友 それが今につながっているのだから、無駄ではなかつたですね。

竜楽 そうですよ。

大友 僕らは無駄だつた(笑)。

竜楽 無駄じゃあないですよ。無駄じゃないと思わなきゃあ、いられないって(笑)。

笑いというのは論理的なもので、オチという結論までどう節立てるかということですから、僕も法律やつていて、論文を書いたというのは、やつぱり役に立っていますよ。

大友 大学の話といつても法学部の話になつてしまうけど、いい面と悪い面があつて、もう二年早く司法試験の受験を止めていればよかつたと思います。それは、我々がやつてきた司法試験用の法律が、近代制度の中のものであつて、近代というものを超える発想が全然ないと感じる

からなんです。それを実感したのは大学を出て別の勉強をしてからです。だからもう少し早く別の道へ行けばよかつたという気がしています。例えば、文学部にいらした丸山圭三郎先生、思想家のソシュールの研究をしていたとても優れた解釈をした方なんです。あとからその授業を聞いたとけばよかつたと思いました。

井川 最近、ファカルティリサーチプログラムでしたっけ、学部横断的にテーマで集まるプログラムができていますね。これは面白いと思いますね。

大友 そうですよ。我々は、ほかの学部の授業を聞こうと思つたら、潜り込むしかなかつたですもんね。

井川 まあ、それはいくらでもできたんですけどね。

竜楽 でもやつぱり、それがカリキュラムとしてあれば、聴き方も違つてくるし。

井川 実は私、去年から法学部の通信教育課程というのに編入させて



もらったんですよ。

大友 へええ。

井川 何故かというところ、自分が若いときに勉強していなかったものを取り戻したいし、もう一度青春をというのもあるんです。でもそれ以上に、社会へ出てからの経験によって、例えば法律を自分の中へどう取り込むのかをもう一回考えたいと思いついてね。生涯学習ですよ。

竜案 いま改めて法律と向かい合うというのは、どんな感じですか。学生時代にやっていたのと違いましたか。

井川 今まで自分が暮らしてきた実際の生活と学問としての法律とのギャップを埋めるものがあるような気がするんです。例えば著作権の問題なんかでも僕ら大きな関わりがありますが、著作権法を読んだだけでは何かぴんと来ないじゃないですか、砂をかむみたいで。でも自分が実際に被害を被ったりしたら、この法律で対決できると思いますからね。やつ

ぱり学生の頃は、現実と違うことをやっていたような気がしますね。

大友 学生時代は、自分の中に社会的な経験とか基盤みたいなものがないから、民法とか商法は、分かりづらかったですよ。今ならある程度は理解できます。

竜案 そう。お金のやりとりは、経営にもかかわってくるし(笑)。

大友 今ならもう少しわかりやすいだろうなと思ってるんです。

竜案 僕なんか、法律関係の番組をやっていますけど、いま自分がやっているテーマしか興味が湧かないから、法律を勉強しようという気はまだないんだろうな。

井川 僕は、ドラマ書くときに弁護士を主役にしたりとか、検事を主役にしたりすることがあります。

竜案 そうか、そうか。

井川 番組には、弁護士さんとか法律監修みたいな人がついているんですが、やっぱり書き手が前提として、うそを言っつてはいけないしね。だから勉強しようと思つたわけですよ。社会人になって仕事の必要上から、いろいろなことを調べたりするうちに、おもしろくなる。だから勉強するということとは、資格試験に合格するとかではなく、何か自分の滋養になるためだと思えますね。

大学のあり方が変化している

大友 勉強の目的を考えると、今は昔と比べて、学問のあり方自体が随分変わってきていると思うんです。例えば落語にも出てくる「三くだり半」という言葉ですが、これは、男性中心社会における男性の横暴の象徴みたいなものであって、一方的に亭主が女房に離婚を下すことができると考えられていたわけです。

竜案 男尊女卑の象徴みたいだね。大友 でも、新しい研究では、江戸時代は女性の数が少なかったから、女房を娶つた男はとも女性を大切にしたらしいんです。そういう状況を考えると、むしろ女性が一本立ち

をするための許可証、つまりは通行手形みたいなもので、女房のほうから亭主に三くだり半をよこせという事例が随分あつたようですよ。

井川 へええ。それはおもしろい。

大友 つまり、こんな風に研究が進むことによって、もの見方ががらっと変わってしまうということなんです。これは一例ですが、もの見方が変わることで歴史、学問のあり方が大きく変化し、それによって大学も変わることになったんです。僕が、学問が変わってきたの感じたのは、東大の教養学部の手キストに使われた「知の三部作」という本が売れた頃からですね。僕らが現役の学生だつた頃にはこういう形の学問はほとんどなかった。それが、今はメインになりました。中央大学でも、こんな授業をどんどんやってもらいたいですね。

竜案 もうちょっと具体的に。

大友 例えば、今まで学問が取り上げてこなかったようなものが、実

は学問の対象になるんだということがわかってきた。知の三部作の一つ『知の技法』に書いてあったのは、

マドンナの写真集をテキスト論的に読んだり解釈したりしている。いわゆるサブカルチャーといったものが当然のように学問の対象になっているんです。僕らの時代には、そういうものは学問になりえなかったはずですよ。だから、学問のすそ野が広



がってきているし、それにアプローチする方法論も変わってきているんですね。

竜案 すそ野は広がっているけど、来る学生は少なくなってきたね。

大友 そこがね、ちょっと問題です。

竜案 相当細やかに対応しないといけない。

井川 僕も若いときには、何かはつきりした目的があって勉強して

いたわけじゃないから偉そうなこととも言えないけど、ただ単に就職のためにいろいろなもの勉強するのはなくて、実は世の中のために全然役立っていないと思えるものを研究してもいいような気がするんです。例えば法律だったら、弁護士役には立たないかもしれない詳しい法律を意味なく勉強する。世間的に言うとなんか勉強かもしれない。ちょっと話がそれますが『弁護士ヒューイ』というサマセット・モームが書いた短編

小説があります。

竜案 どんなストーリーですか。

井川 それは法律家で弁護士をしていた人が、人のトラブルの仕事をしていて私の人生は何なんだと思つたときに、法律書を全部捨てて、そのあと私の好きなのは歴史だといつて、ヨーロッパの歴史を勉強し始め、

人生の最後の十年ぐらいは『ローマ史』でも作ろうと勉強したのだけれど、結局学問の途中で死んでしまうんです。自分にも世の中にも何の得にもならないことでしたが、一生懸命勉強したそのこと自体、弁護士ヒューイにとつては、幸せだったと結んでいるんです。僕は、学生の一時期、

そういう期間があってもいいんじゃないかと思うんです。だから大学には、そういうことができる環境をつくってほしいんです。

大友 今年から大学が始めたという「キャリア・デザイン（学生一人ひとりが自ら将来をデザインする為のサポートプログラム）」でしたよね、

とつてもいいですよ。でも、こう進んで、こういうふうにかリヤアを付けていくというシナリオからはずれたときのことと同時に考えてほしいですね。

竜案 人生はシナリオからはずれてから面白いですね（笑）。

井川 僕もそうだけど、はずれたときっていうのは怖いよ。

大友 挫折を経験するというのは、やはり必要なことだと思う。

井川 「どうなるんだろう」というよりも「なんとかなるやろ」と考

える。要するに考え方の問題なんです。

大友 キャリアデザインはとつてもシステムチックでいいと思うんですけどね、それからはずれたときに

どうするかというのは、絶対このプログラムの中で必要ですよ。でもね、やっぱり羨ましいな。こういうプログラムがあるということは。

竜案 そうですね。大学がこま



ですよ。

井川 その時、神宮球場へ行った？

竜楽 行きました、行きました。

井川 あの「草のみどりに、風薫る……」をね、あそこで教えられてさ、中央大学の校歌なんて歌ったことがないじゃないですか。知っているのは中附出身の人ぐらいで。

大友 僕は合唱団にいたので知っていました。実は中附出身ですが。

井川 ああ、そうですか(笑)。

大友 もう、今は歌えませんが、当時はハモれたんですよ(笑)。

井川 そう、そう。神宮で、みんな大声で歌ったときに、「ああ！中大生なんだな」って感じました。向こうが早稲田じゃないですか。有名な曲が聞こえてくるわけですよ。

校歌と中央への思い

竜楽 そうそう。そうだった。

大友 「都の西北……」。

井川 向こうは岡田がいたんですよ、阪神の。でも勝ったんですよ。

竜楽 ええ、覚えています。

井川 香坂がピッチャーで。

大友 普段、中大の出身だったというのを別に意識して生活しているわけじゃないけど、駅伝で中大が何位とかっていうのを聞くと、やっぱり応援するでしょう。

井川 そう、そう。

竜楽 しますね。

大友 そのときに、どうしても出身を感じますよね。

井川 いつぞやも駅伝で、一位走っていましたよね。途中で落ちたけどね。水泳なんかもすごいよね。

大友 そうだ、そうだ。

井川 うちの娘がまだ小学生なんですけど、水泳をやっているんですよ。

以前何かの大会が中央大学のプールであったんです。それを僕が親ばかです。多摩キャンパスの中にあるプールで、源純夏さん、中村真衣さん、田中雅美さんは、みんなここで練習しているんですよ。

んだよと言ったら、もうやる気を出して「私も中大に入りたい」です。

中大に入ったら水泳がうまくなると思っているんだ(笑)。でもそういうふうには言われると嬉しいね。

大友 世界につながっている水かもしれないですね。そういう実感があるっていうのはいいですね。

竜楽 ところで、OB会へ行くと思っんですけど、中大の方は律儀なんです。校歌と応援歌と惜別の歌は、全部最後まで歌う。

井川 「惜別の歌」なんか、いい歌ですね。

竜楽 ほかの大学にはない。

大友 他の大学では校歌で終わりでしょね。

竜楽 そう、そう。

井川 島崎藤村が作詞とかいったら学生ときでも皆驚いていた。

大友 ああ、そうでしたっけ。

竜楽 ええ、そうですよ。

井川 それで僕、『夜明け前』を読んだんですから。そしたらあれは

竜楽 そういえば、我々が学生のとき、公式野球が日本一になったん

なかなかの歴史小説で、いっぱいエ
ンターテイメントがあつて。そうい
うところに関わりがあるっていうだ
けで、嬉しくなりましたもの。

竜楽 ただ、今は校歌などを歌う
機会がないでしょう。

井川 歌わないですよ。

竜楽 私は年間五〜六回歌つてい
ますよ。OB会の講師ですから(笑)。

大学への要望があるとすれば

大友 大学にお願いしたいのは、
インターネットを通じて情報発信を
してもらいたいんですよ。大学の
ホームページで、今年どういふ論文
が発表されたのかということぐらい
検索させて欲しいですね。

竜楽 ああ、なるほどね。それは
どの大学でも、取りにくいのかも。
大友 そうですね。「中大の論文
データベースはいいよ」ということ
になると、みんながアクセスして、
そうなる。「受けてみようか」とい
うことになるかもしれない。大学は

学問をやっている場所なんだから、
一般に向けて、こんな情報発信をし
てほしいものです。

竜楽 そうですね。

大友 先生方のページに、それ
ぞれムラがあつてもいいじゃない
かと思うんです。やる気のある先生
のページはどんどん膨らませていつ
てほしい。僕が大学のページを見て
いて思うのは、何学部も今年のカリ
キュラムは、先生は誰々、誰々……。

そこをクリックするとその先生の授
業の内容が四百字ぐらいの文章で、
一応おざなりにあつて、その先生の
経歴が一応ある。でもそれしかない
んですよ。その先生の声が聞こえて
こないですね。先生が本当にどんな
ものに興味を持って研究しているの
かということが全然わからない。だ
からもしやる気のある先生だったら、
そういう人にはどんどんサポートし
て、そのページを膨らませてもらう。
やる気のない人はしょうがないから
放っておけばいいんですよ。今は、

先生の人間的な情報も研究の情報も、
詳しいものが無いから、とつてもつ
まらないんですよ。

竜楽 僕も今までの対談で、面白
い先生がいましたね。先生をPRす
る場があれば、結構おもしろい。

大友 大学の先生なんかやろうと
いう人はくせ者なんだからさ(笑)。
そういう個性をどんどん出してくれ
れば、人間っぽさが伝わるんですよ。

井川 そうですよ。

竜楽 個性豊かな先生がいるつて
いうこと、分らないですからね。で
も大学名を知っていても、自分が受
ける大学にどんな先生がいるかなん
てことは、ほとんど考えもしないで
受験していませんか。

大友 逆に言うとそこが売り込み
のポイントで、先生の顔で大学を売
るという手がありますよね。

大友 それこそ僕は、丸山圭三郎
という人がこういうことをやってい
る人で、この人が先生でいるという
ことがわかったら、それで受けよう

と思つたかもしれないし。

竜楽 それは大事ですよ。

大友 学問をやっている方は、宣
伝に目が向いていないからね。

竜楽 それを好まない人たちもい
るみたいですよ。

井川 大学の先生の個性が、外部
の人にもわかるようなホームページ
にすれば、受験生が興味を持つて中
央大学へ行きたいと思つたかもしれな
いですよ。



今回は同級生ですから、終始リ
ラックスマードで想い出話に花が咲
き最後まで会話がとぎれませんでした。

それにしてもずいぶんホウガクを
違えたものですよ。三人きろえび
い会が開けますよ。井川さんが新作
を書き、私が演じて大友さんが企画
構成すればいいんです。スポンサー
はもちろんな中央大学でしょう。

同級生トリオはハウソウ界で頑張
るぞー。